

Handwritten label with a red stamp:

2.045
2
13



明へ 13
辨 2045
卷 2

反古侏羅部卷三

目錄

石確筋^{いしやくしん}刺^さ
 論語^{ろんご}讀論語^{よみろんご}不讀^{よまぬ}
 子者^{こしや}三界^{さんがい}之首^{しゆしゆ}初^{はつ}
 毒^{どく}於^を喰^く血^{けつ}舌^{ぜつ}
 馬^ば了^{りょう}乘^{のり}麻^{あし}牛^{うし}了^{りょう}乘^{のり}
 牛^{うし}者^{しや}牛^{うし}連^{れん}馬^ば者^{しや}馬^ば連^{れん}
 盲^{めう}者^{しや}蛇^だ了^{りょう}不^ふ恐^こ



反古侏羅部
卷之三
目錄

反古佐羅部卷三

作者愚鈍齋

石碓城跡小刺

者座、佛小成山、繆とる、色、
 十の、後、比、き、ら、る、石、う、も、ハ、物、小、刺、と、母、
 人、多、の、身、の、後、ち、ぬ、も、一、の、尖、ハ、な、り、
 視、ハ、信、玄、し、時、分、追、江、の、國、の、城、を、た、り、
 軍、中、の、兵、吞、も、兩、持、仕、甲、の、手、指、を、投、今、
 小、残、て、家、よ、は、り、定、紋、城、一、つ、有、惟、子、ふ、つ、を、
 丈、ゆ、り、を、む、く、い、よ、柄、糸、の、足、あ、り、
 形、の、能、極、り、は、ま、人、中、を、ハ、き、り、ふ、む、

心之痛の神さびる一匹一匹を講じても
 ちねさきとすむしくとら店先小溝はくらの
 出少と鳴りくも軍始り鎌倉舎の西入事
 とくもい水のそ我心一毒よけ糸一徳
 しく討死まれば牌々大名必と二階
 丹目果さくめたすく死ぬりと跡をたぬ
 の病な強強の花を祓らふ自代々猫をそ
 詳居申しに漆て跡の相言り始りハハ
 せして我半成しそを相地西く入婿は
 ハハハの善禮り遠い小いと由をとりし

ふ足の前とけびておろが怒りもさひひ
 大事れお濃年小砂を以てはせらるる
 ちちゆてさりとも母もやうさ人の借度と
 ぬまハちまねも母とも男業のちぬと
 ちていもゆいといつそゆさうともさう
 てハちゆりのくせもちちをさしてさるる
 ま家も置もサ人並の作をありとも
 親の身も自満面まて仕極五十貫目
 おこして節目のよし何人、初ハ大知り
 ぬりの信留姑もる子とかく教ぬ

ていつかやうりやうしてをくそくかきゆりし
男の不と揚々の言又して行と書せし
よて母を婚い年ハ河舟よはさるゆ
事成ありてううく煩福使下女は
まてる備成むいひ西隣へをり候こも
懸よ連そあうりく病も持れをそ
のく成履て天満宮は女度病字早
平勝よすいふく概念を誠定す来
南やうにと知くを天祥自も久替人ハ廻る
移がひハ入廻はるまう少んよあはよ
あはまを

あはまをうりそくし我よ知ハ多理
う誠の嘘紙を記まきとて紙を紙かきら
神き記のたそんりて女の着の如る
細き方からして先の大よきさ石確紙束
とハソいあやまらりれ紙石確紙を看少
刺しあし

論語の前後知

儒士のつり踏以をその養生古より論
語の海流あしをといからよ女あり
凡親の我子のつりのせをくら紙よくを

海の親るれ孔子の子城をくし申すもこれ四
 の好水のたへおしくふ人のふの親の
 備ふく一報が井戸堀きるとして子息が学
 文好ありはそとくとも海城致へつり成
 乾きさらしは親の慈より井戸堀小大
 孝とやして堀るる古文書受ては口が喰ぬ
 不孝者とあつて親の杖柄と書物とを
 くりわきては舞いとて意場と一親の
 かり雁まきも小子息が病あて法授る後
 了りや存ふとて教あるもやま一隣人成子が

猶可愛といふはなれきつることきとひを理り井
 戸堀城教と由也か本ハせまし其人の
 好不地より立教り可年報り方のおふ
 居居出し一推小綱一投波二十人方の
 切八合のち紙粥よ焚て二十人小吟
 百本始末の八束しと海といふ記をえ
 て居たりと空虚くくと記をほふ子息
 成りしもの気んしわきく小思の成り
 のも気んしとまじしむらぐは親の足癢
 始末てちまきれはきとまじし無垢紙はし

孟子

三

子息の福なればを欲せしむれば
 種々の福をば成すもさうし
 ぶくしをばあしるも人指さ身代成漬と
 多親の家業は好ぶあり嫌子あり
 同家業よ親とハるるの因やりの者
 の又好しと云量とふ善量との授ても教
 て毎初うぬその人のもく成るるを
 親の心をなつて安んずるに子成るるの詩ハ
 宜哉我ハ親の仕来しと業成止めをふ
 ならしめて成りて天定を別成に成を川

つとあるかごとく病人の身一めいらく好
 る上も小なるく終ぬやうい嫌く成生
 分前小者をもして代脈小遣と教ハと
 清くしをれを清濁よとの清濁ありん
 としむり子の好す成を教成をさする
 をしれ成清濁よとの清濁ありん
 ときー

子ハ之界の首樹

けしきささる敵のちごと身まほしく福ハ
 ぬとの罪人の桎入らる格成なり



免さても免らまじと勅のたまふぬ子も盗
 して親を呼ぶ所ゆてあやまらせま
 の腰紙ハきよ折あつてひて悪き悴疾は
 勅者いそせハい耻ハ晒ぬ子ハ之界の首
 骨と涙も鼻紙もこまての口上は甚い侍
 あり親也大要紙を一族紙減らん
 ハ子も亦罪不落之界の首柳をんハ悲言
 又何そそら度いさめてあやハ泣て親の
 阿く小波子のあつく紙親の目少て疾まん
 故母のあつハ早勅者ま一親の目まこ

悪く又ゆり子の他人ハあれ成悪き人
 ぞ一悴ハ一旦不り踏て勅者紙を
 長子心紙改疾昼持ては合のくハ
 合紙を親不むいさて紙を親成あ
 業よまよと親より子ハ之界の首柳てこ
 ころ今又出さるといハちもれと母甚勝ハ
 の中合点ソも子ハ之界の首柳をん
 ハ親ハ之界の指をり一免角も亦ハ悪
 小と免まぬ親子もあれぬく

毒氏舎ハ四氏咄

其國小入ハ制禁氏回リ後記の教吉
 利死丹博奕々ニ煙管ハ才一の株ホチリ
 風塵小隠林をめぐりて人の成候重面同
 一ハ皆毒我ハの思成身度もくはは
 少思兼もろろ一御を人所の成是自
 の大毒石垣の行地先斗町の秋の月西
 奈の揚柳伝吉の林半もれ等の毒成
 移りててんくハ我身代の思成咄て
 一ノ要熟人の妙を候ハ根を儲成

やむハ毒ハあくる基と思ひ笑ハ福の膏
 よ方成粉もろろハ儲を突を色人ハ身
 運下成安国ようつくハ成をろハ皆毒
 おのひて我方のせんがハ成のハ一も
 うよ舎のよハ礎をまきしきハと孫ハ虚
 人世の中ハおますいとハまをがとおの孫ハ
 舎山の神ハあいは成編差成やしくか
 利枝本山の捨の本ハせめハれ笑ハ
 高いの雷通成約て持とかりあまのぬま
 乃成成ハハふまもしハ約がをうハま

源氏物語

卷之三

七

その時この積の積香うちしつちやく
さうとさきとしん 沼吉も令梅もさく
この四紙きく 咄ハくハ知らく
あては清水悔心の四紙咄ハ鈴紙ゆ
耳紙さくさく茶碗を割てはつて
さ

馬小宗まて牛よ宗

老眼ハ牛の背小道徳折紙抄りか
急ハ馬の尾を巻く折紙抄りも
の直さくハ馬の尾を巻く折紙抄りも

初ぬをの又す代りし人も
とて抄りぬ智恵を過多紙をり
福の智恵ハ切あり一紙の思小
層よわくし人なきのむ
むハ儀ふあり二紙の人の合
柄子よきれハ自満ハ誠の高人
馬ハ安も軽き速ハ疾ハ
ゆまハ安も軽き速ハ疾ハ
てまハ安も軽き速ハ疾ハ

かりんがうがーふ高をれはらやう成いらち富
 のこや城をそとと地よ入はる後道とを
 そともい深回小る成くを成ちと母行ど
 あしぬ身代と成長に諸はをしくく質
 屋の流矢小ありても柳子合との土の
 子重踏成ゆれて思あ成神りうらさの
 靴とてちともゆるぎをややど母あぬ牛の
 歩小たしひ人のてむせいゆいよきてを
 ぐまんのころふかすらぬを息しを靴敷の
 新ふも海ゆらぬふま人もゆらばその附子

里のころよ系をくしへのゆ成るぬ津ハ
 初るこ牛よ系頂羽強き肝もる成の
 粘成ますしん自勿悪事成はゆりも重
 の約ふ系をて逃し母初るこ牛よ系一
 追年よいついふ捕ららぬ成れとて好いま
 ちよ系合まて後とりよ事とを自油
 断とそまやいこい

牛ハ牛は馬ハ馬は

危邦ハ入る亂邦ハ居る行の録
 吾何適し七人の自死子畜ふよ其成

ありし四月の自製更の糸にハツビを織り
 入るは人の目よき織り多し細布面
 の脚布或引る凡ハ男の膝目華身代了
 心成苦く毎くわく我れをの糸を製り
 するは指へ少りまらぬ高の風呂友
 持し成すし誇り合ふるハ合身衣
 の糸入るる今更の更ハ心易ハ太報持替
 古新付く福氏揃かきふして行し身
 の大名の御威は紋糸を着し着るは
 鶴海濱の風呂敷包紙めらるる湯や路次

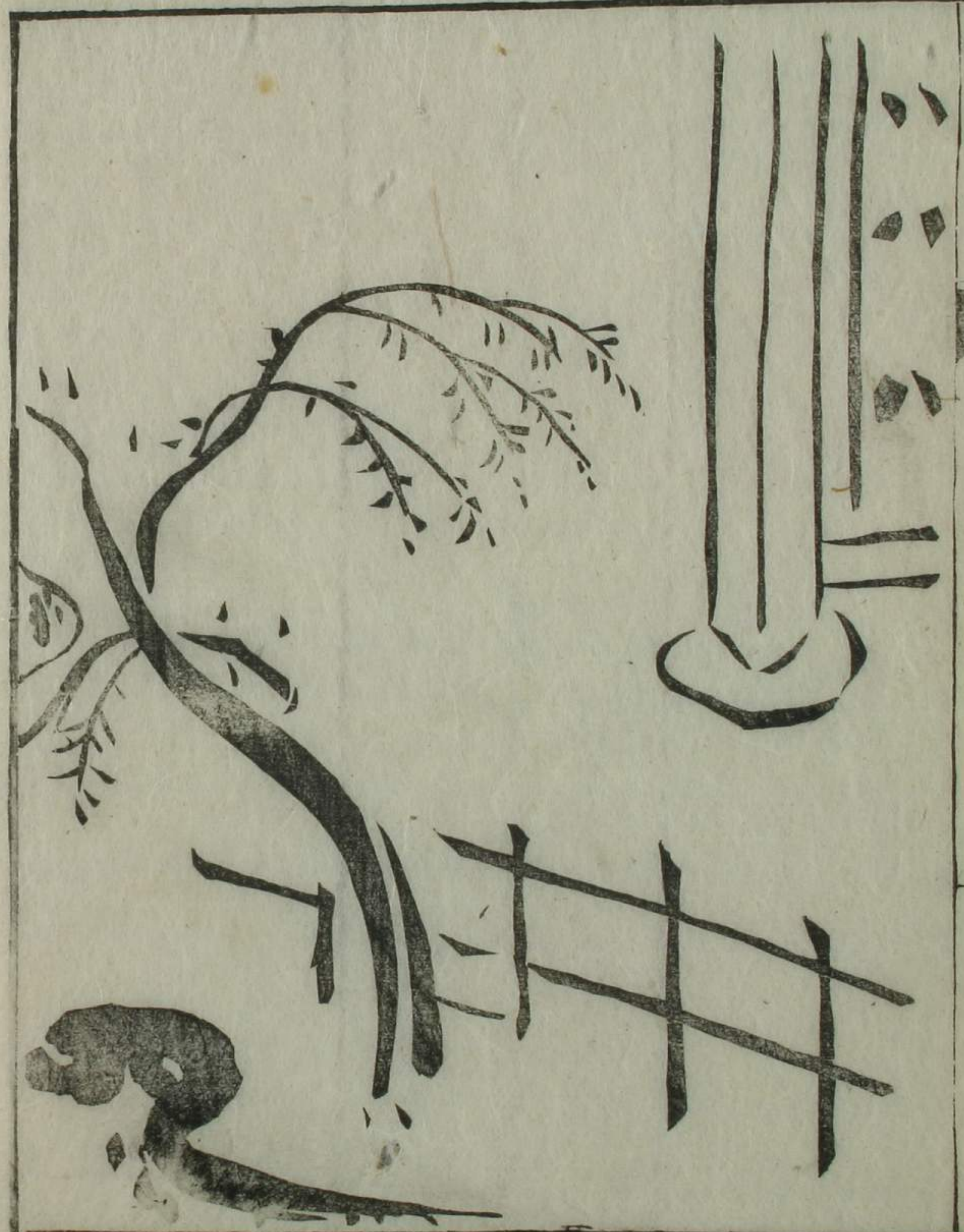
小はくぬき身代和風よきなりしは
 大小しして武之人技持し親のゆりし
 合ハ益中くぬき取ふして鞋不食貧く
 儒と名をのめ持の町人と肩成あく女
 持や一回登ハ虚空一法をハ儒を成ん生
 く致し病人ハ留るは茶作様とすらるる
 如肆ハ合持或思わし考も安用持師を
 儒者の回休も若の張りて毎口ハとあも
 ころ濃紙花やうととぬきぬき合ふ
 流しハ安用とて野原ハ茶作の娘とて

山崎
山崎



山崎

山崎



山崎

七法講のハ精進のミシハ大木留をハ女肆
 小三つら子同根又元宿小も話の由成着を
 盈も初より廻さすと道たさるうなをそハ
 拂ぬとつ兵よハ眩病神う所をよふか
 文よ友あり話少も人よよるのあうあ
 者付合城まきてもつらとどのハをり
 まうー半つ色もハまはきを求ー
 音有蛇よ也と
 彦の誓者う之居好月明回ちの吐
 湯杖根て手成書せ小思必あも

正連あ海ーと一白よをぬハあつらひ
 ちよなるくせら三分ハ三界の捨ちの益少も
 きくぬと成大率そつ小吐ー三文よもな
 流ぬ智魚自満不現屋ますい古のを儀
 ぶまん我よとて廟小ちらうやう成書家海を
 成うつとせ且言句よ外さぬ根指の得
 よ奥あふと成ぬり流のむと成ぬ庭は
 る少りそ相話後け上るよ中言小はい
 て人のうりし我よを夜明ぬ妙庵をこち
 一庭のうらみれつきー高よ切を成切

けし上糸標の糸漬もそのぬまの志の待一
 首ゆらあぬれなる痛人ふよとてきりせ
 あしぐひを尖て碾茶紙のこぬぬる薬
 以中墨跡紙瘰癧自満とる方の及見え自
 満浄ありやぶとてその要紙ほめて
 やりとささしん紙のえあれぬ太報ハ
 や返那ハ細中あやう洞とのけ合思
 四くときまろく目して引たひよハ
 一々奇ハ面白くも京鹿子松よま
 くれ素人の面白くも信文ま紙のぞ

と相ゆら賢人う面白くもかとおりハ
 事もまろく病ふのちあてらるるぬ
 室人人深きよぬ虚人飲のこる鹿ハ
 中りしちまろく紙汁のちり脚り
 葱自満甲のうとて目わたの紙のぞ
 側わ指てハち中よと行紙流 紙内
 まて 羽像々せり

復古伝説巻三終

